

【報告】

一橋大学「戦前期アジア諸国写真コレクション」について

小野 亘（学術情報課雑誌情報係）

一橋大学学術・図書部

1. はじめに

一橋大学附属図書館（以下「当館」という。）は、「戦前期アジア諸国写真コレクション」（以下「写真コレクション」という。）という資料を所蔵している（図1）。

この資料は、長らく未整理だったものを「一橋デジタルアーカイブス」（Hitotsubashi Digital Archives、以下「HDA」という。）¹といういわゆる電子図書館システムが2000年に導入された際に、その最初のコンテンツの一つとして電子化され公開された。そして2007年にHDAが閉鎖された後、HERMES-IR（一橋大学機関リポジトリ）のSpecial Collections²に引き継がれ、公開されている。

本稿の構成は、次のとおりである。2.で写真コレクションについて内容的な解題を試みる。3.では写真コレクションの物理的な特徴、4.でその整理、保存措置について述べる。5.ではマイクロフィルム化、当時の電子化の概要について述べる。

2. 解題

2.1. 写真コレクションの概要

写真コレクションは、第二次世界大戦期に陸軍経理学校がその研究のために収集したと推測される、昭和初期から第二次世界大戦期にかけての中国、満州、東南アジア、インドネシアや太平洋諸地域の風俗・風景・民族・産業等の3,705枚の写真のコレクションである。地名・分類ごとに、330の袋（封筒）に分けられていた。なお、この他に1,289枚のバラ写真が存在する。

撮影したと思われる新聞社等においても、GHQに接収された、社屋が焼けたなどの理由の他、報道写真とも性格が異なるので、この時期のこのような写真はほとんど現存しておらず、それ自体が貴重な写真である。また、陸軍経理学校の活動の記録として、あるいは戦時期のメディアの活動の記録としても重要なものである。また、この時期のこれらの地域の民俗や民族学・地理学的な資料としても価値のあるものではないだろうか。

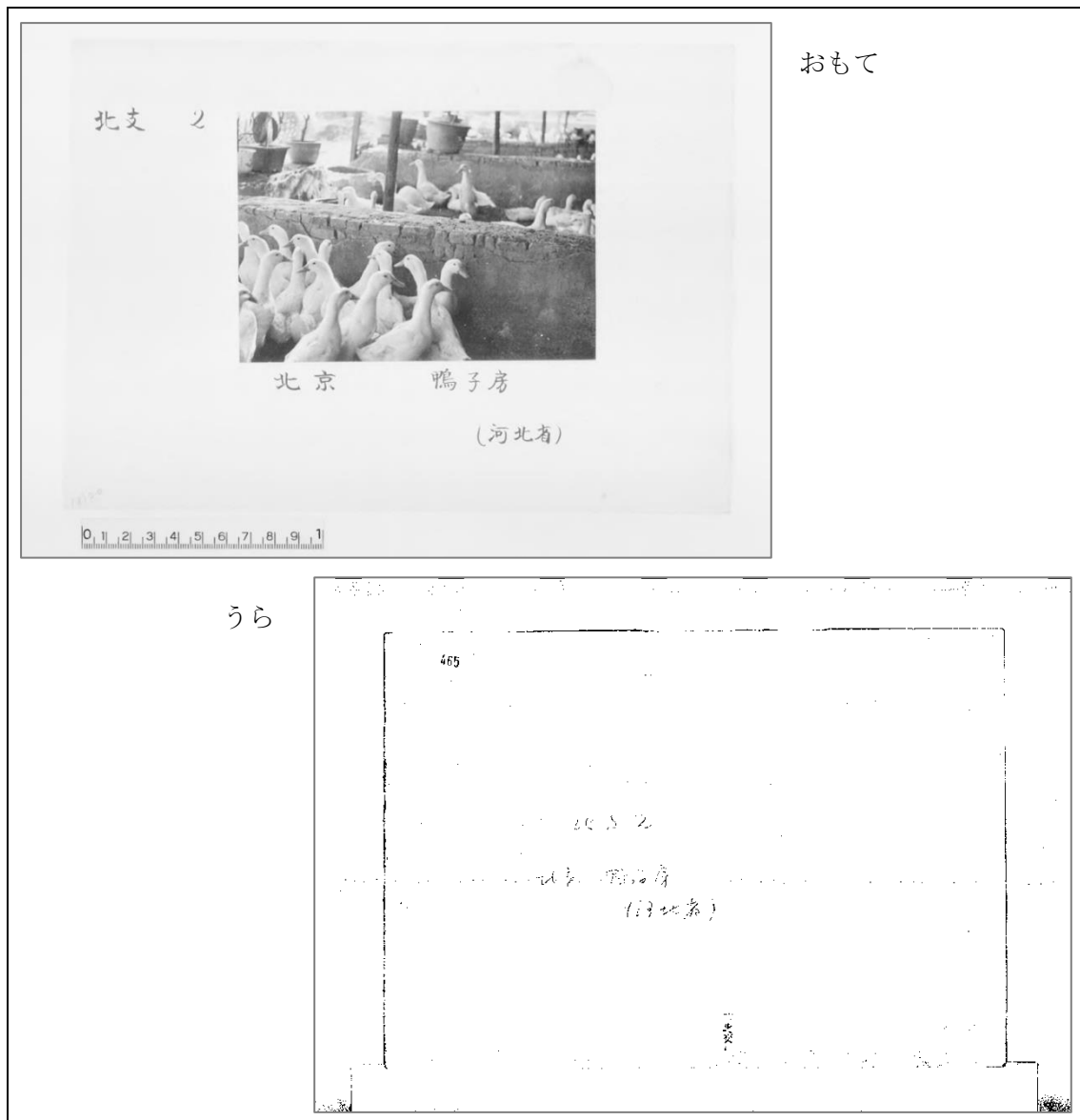


図1 写真コレクションの一例「鴨子房」

以下本章では、2.2.で写真コレクション自体の来歴について、2.3.で写真台紙の記述から推測される個々の写真の来歴等について、2.4.で封筒ごとに記述された内容の分類について、2.5.で封筒及び写真台紙に記述された撮影対象の地域について、2.6.で封筒や台紙に書かれた日付について、2.7.で台紙に書かれたその他の記述について解説する。

2.2. 写真コレクションの来歴

2000年に整理を行うまでは、「軍配組合」関係資料の一部として「当時のアジア諸国の風俗・風景写真数千枚が段ボール120箱に収納され、チリ、ホコリ、猫が入りこむ地下通

路に置かれている」³とされていた。1995年のマイクロフィルム化の際にも、「軍配組合写真資料」として整理されている。

「軍配組合」関係資料は、1944年に東京商科大学東亜経済研究所(現・経済研究所)に届いたもので、詳しい移管の経緯等は不明である。この資料を受け入れた山口茂(東京商科大学教授、1893-1974)の下でその整理を担当した西川義朗(当時、東亜経済研究所臨時研究員。一橋大学名誉教授、1915-1981)によれば、「中支那軍票交換用物資配給組合」(「軍配組合」と略称されていた)(中略)経理部金融科所属の写真資料五四七部⁴があったとされているが、現在「軍配組合」関係資料には写真資料がない。また、547部という数字は写真コレクションの封筒、写真の数ともまったく一致せず、その関係・存在は不明である。しかし、2000年に電子化にあたり改めて調査した結果、以下に述べるとおり陸軍経理学校の資料であった可能性が非常に高いことが分かった。

2.2.1. 陸軍経理学校

写真コレクションが当初納められていた封筒の一部は「東京都北多摩郡小平村 陸軍経理学校」と印刷された事務用封筒であり、その他の封筒や写真が貼られている台紙にも

- ①陸軍経理学校研究部
- ②第一標本室
- ③池本主計少将閣下寄贈

などの記述がある。その袋にいつ入れられたのか、写真がどの時点で台紙に貼られたのか、台紙や袋の記述が作成と同時かそうでないのか、正確には分からないが、これらの記述はすべて陸軍経理学校に関係するものである。これらのことから、少なくとも写真コレクションは陸軍経理学校と何らかの関係があることが分かる。

また、当館には陸軍経理学校の蔵書であった「若松文庫」等の図書や掛け図(地図など)が保管転換されている。「旧陸軍経理学校図書始末」⁵によると、陸軍経理学校で講義をしていた本学(当時は東京商科大学)教授であった村松裕次(1911-1974)が、敗戦直後、散乱著しい「若松文庫」等陸軍経理学校図書の散逸を憂えて、その本学移管を提案している。加えて、当時、陸軍経理学校からは員外学生として多数が東京商科大学に派遣されている。また、陸軍経理学校の学生としても東京商科大学の卒業生が多数いたようである。

これらのことを考え合わせれば、この図書の移管の際に、陸軍経理学校から移されたものである可能性がある。

(1) 陸軍經理学校の概要

「陸軍經理学校五十年史」⁶（以下「五十年史」という。）によると、明治19（1886）年にその前身である陸軍軍吏学舎が設立され、明治23（1890）年に陸軍經理学校条例が制定され、「戦略戦術の事のみならず一般的軍事知識の指導教育は經理教育上徳に重要」なために「軍事的には既に或る程度まで成人期に入れる各兵科の青年将校を招移し、經理上の高級将校として必要なる學術の教養を加え」（原文旧字体、以下同じ。）るために、陸軍經理学校として設立された。

以降、制度等の修正が何回もあり、明治35（1902）年「員外学生を設置し学生卒業者中の優秀者を帝国大学に入学せしめ、陸軍經理上必要なる専門的學術の研究を為さしむる」、昭和10年には「經理部士官候補生及…丁種学生（各閉架並に經理部に属する准士官及び曹長級より採用するもの）を以て經理部将校の主なる補充源となし、更に其の高級将校補充の源泉として大学令に依る法、経、商科大学の卒業者を択び之を採用」するとし、これが敗戦まで続いた。

陸軍經理学校は、当初新宿区若松町（現在の東京女子医科大学付近）にあった。この若松町の名前が、同窓会「若松会」や当館にある經理学校の文庫「若松文庫」の名前として残っている。

そして、昭和17（1942）年3月に「戦局の進展に伴い学生・候補生・生徒の増員となり若松町は手狭となり」⁷北多摩郡小平村小川山家（現・東京都小平市喜平町）に移転した。これはかなり広大な敷地で、敗戦後「校舎敷地は、建設省研修所（建設大学校を経て現在国土交通大学校）、陸上自衛隊業務学校、同調査学校（現・陸上自衛隊小平駐とん部隊）、関東管区警察学校」や農地に払い下げられ、後にいくつかの工場が建った⁸。これは現在の本学小平国際キャンパス（当時の東京商科大学予科）のほぼ隣である。

(2) 陸軍經理学校と台紙等の記述との関係

先にあげた封筒や写真が貼られている台紙の主な記述と、陸軍經理学校との関係については次のとおりである。

①陸軍經理学校研究部

陸軍經理学校研究部は、「陸軍經理に関する學術の調査及研究を行はしむる為」（五十年史）、昭和9（1934）年に本部、教育部に並び設置された。

陸軍經理学校では、前線での物資の補給について研究しており、また経済戦にも関わっ

ていたことから、それらの研究目的に写真コレクションは合致すると考えてよいのではないだろうか。

②標本室

標本室は、敷地の配置図を見る限りでは、敷地のほぼ中央「教官室文庫」（これが若松文庫のあった場所と思われる）に続いている「講堂標本室」にあたるのではないかと。

明確にどの研究に使われたかは特定できないが、コレクションが研究用の資料として「標本室」に置かれていたことが推測される。

③池本主計少将閣下

この池本主計少将は、昭和18（1943）年6月から昭和20（1945）年1月まで経理学校の幹事であった池本信巳陸軍主計少将であろう。幹事は、「校長直接の補佐官」（五十年史）であり経理学校のNo.2である。この時期は、封筒等の記述からちょうど写真コレクションが整理された時期にあたっている。後で述べるように、何らかのルートで入手したインドの写真を、研究部に渡したのではないだろうか。

池本氏の経歴を見ると、明治28（1895）年富山県生まれ、陸軍経理学校に入学（年不詳）、大正6（1917）年優等者（主計候補正11期）として卒業、また大正15（1926）年高等科（甲種）学生を優等者として卒業、大正15（1926）年から昭和4（1929）年まで員外学生として東京帝国大学経済学部を修学している。敗戦時は、東海軍兼第十三方面軍経理部長であった。

2.3. 個々の写真の来歴等

写真はすべて厚紙の台紙に貼られており、台紙の裏に、「朝日」、「讀賣」、「毎日」、「同盟」、「華北交通」、「南興」、「上科」、「岡集団野戦貨物廠」、「海軍報道部」などのスタンプや記述がある。新聞社が3つ、通信社が1つあり、海軍報道部は軍の情報機関であることから、写真の撮影者または収集元等個々の写真の来歴を表していることが推測できる。

また、台紙の表のほぼ9割に鉛筆書きの数字が書かれているが、それまで何を示す数字か分からなかった。しかし、2000年の電子化のインデックス作成で、それもデータ化した結果、台紙裏のスタンプごと、つまり収集元ごとの通し番号であることがわかった。この順番にリストを並べ替えてみると、次のとおりとなる。

- | | |
|--------|---------|
| ・ 華北交通 | 1,770 枚 |
| ・ 朝日 | 529 枚 |

・ 毎日	397 枚
・ 上科	232 枚
・ 同盟	155 枚
・ 海軍報道部	150 枚
・ 岡集団野戦貨物廠	142 枚
・ 讀賣	102 枚
・ その他（池本）	76 枚
・ 南興	75 枚
・ 第八四〇部隊	70 枚
・ その他（不明）	7 枚

なお、この枚数は、台紙裏には何も書いていない場合でも、番号付け等で明らかにそこに加えるべきものも計上し、その他（不明）はまったく推測のつかないものである（これも写真内容の傾向から推測がつかないわけではないが、そこまではしなかった）。

これらの連番は、いくつか日付が書かれているものと照合した限りでは、日付はばらばらで順不同である。

以下に、主なカテゴリーごとに簡単に概要を示す。

(1) 「朝日」、「讀賣」、「毎日」

これらについては、それぞれ現存の朝日新聞社、読売新聞社、毎日新聞社にあたる。すべて確認したわけではないが、新聞紙上では未発表であり、また各新聞社にも現存していない写真がほとんどである。

「讀賣」写真中の一部に、「二宮」と焼き付けされた写真があり、読売新聞社の調査により、読売新聞社の二宮勇というカメラマンが撮った写真ということが判明した。また、写真の裏が見られるものの内に「宮崎」「坪谷」「勝俣」「松本」「牧内」などのカメラマンと思われる名前が確認できるものがある。

(2) 「同盟」「華北交通」「南興」

「同盟」は、戦時中の国策通信社であった同盟通信社であり、敗戦とともに共同通信社、時事通信社、電通に分割されている。「対外思想戦の中枢機関」⁹として、昭和 11（1936）年に設置され、戦争宣伝、言論統制の機関であった。「同盟」のものは、ほとんど「情報局

検閲済」等の記述または写真自体にそれが焼き付けてあり、戦時の軍による検閲の一端を示している。「情報局」とは、昭和 15（1940）年に近衛内閣によって設置された内閣情報局を指している¹⁰。

また、「華北交通」は中国華北の鉄道・港湾その他交通を一手に行っていた国策会社であり、「南興」は南洋における製糖その他の産業を一手に行っていた南洋興発という国策会社である。これら国策会社が軍と密接な関連を持っていたことを窺わせる。

華北交通の路線図¹¹に、写真コレクションに記述されている地名を試しにいくつかプロットしてみたところ、かなり路線に忠実にかつ広範囲に写真を集めていることが分かった。

(3) 「上科」

これは、一部「上野科学博物館」という表記もあり、現在の国立科学博物館である。植物の生態に関する写真が主で、進軍あるいは占領する際の食糧や産業の研究であったのだろうか。

(4) 「第八四〇部隊」「岡集団野戦貨物敵」

「第八四〇部隊」の詳細は不明だが、その写真内容を見ると、満州のものであることから、満州に駐屯していた部隊であろう。

「岡集団野戦貨物敵」と記述されたものは、マレー（馬來）の写真である。「岡集団野戦貨物敵」は、第七方面軍に属していた野戦貨物敵である。第七方面軍は、昭和 19（1944）年に設置され昭南（シンガポール）に進駐し、「岡」という通称号（通称文字）であった。野戦貨物敵は、兵器以外の物資の補給等を担っており、岩倉虎次郎主計大佐¹²（陸軍経理学校主計候補正 16 期¹³）が敵長であり、陸軍経理学校と何らかの繋がりがあったのだろう。

(5) 海軍報道部

ここに含まれている写真は、一部、海軍としか書かれていないものもあるが、「G〇〇〇—〇〇〇」という独自の番号付けがなされており、一連のものであることが分かる。

海軍報道部は、昭和 12（1937）年に大本営が設置されるとともにその中に設けられ、「戦争遂行に必要な対内・対外並に対敵国宣伝報道に関する計画及び実施」を任務としていた¹⁴。

(6)「その他（池本）」

これは、台紙裏には何も書かれていないが、台紙表に「池本主計少将閣下寄贈」と書かれているもので、内容はすべてインドの写真である。池本氏については、2.2.1. (2) で既に述べたが、その経歴からはインドとの関わりは不明である。

2.4. 封筒ごとに記述された内容の分類

封筒の右端に、次の1から14までの分類番号とそれに合致する分類名が墨書されている。これは、写真台紙にはない。[]内は、分類ごとの封筒数と入っている写真の枚数である。

- | | | |
|------|-----|--------------|
| (1) | 民族 | [42 袋、930 枚] |
| (2) | 生物 | [27 袋、187 枚] |
| (3) | 地形 | [35 袋、260 枚] |
| (4) | 気象 | [4 袋、 16 枚] |
| (5) | 植物 | [12 袋、 39 枚] |
| (6) | 農牧業 | [29 袋、326 枚] |
| (7) | 林業 | [13 袋、 57 枚] |
| (8) | 鉱業 | [17 袋、113 枚] |
| (9) | 工業 | [31 袋、607 枚] |
| (10) | 水産業 | [17 袋、 94 枚] |
| (11) | 商業 | [21 袋、152 枚] |
| (12) | 交通 | [24 袋、256 枚] |
| (13) | 聚落 | [40 袋、594 枚] |
| (14) | 雑 | [18 袋、 74 枚] |

これを見る限りでは、民族・聚落という民俗学的なものと、工業・農牧業という産業に関わるものが多いことが分かる。非常に雑な推測だが、この辺りが、陸軍経理学校の研究内容であったのだろう。

2.5. 封筒及び写真台紙に記述された撮影対象の地域

封筒及び写真台紙には、「印度 1」のように地域名が記述されている。封筒及び写真台紙の記述は一致しており、地域名の後の数字は、封筒が分割されている場合に通し番号が付けられている。この地域は、次のとおり 41 地域ある（() 内は写真数、多い順）。

北支 (1,393)、印度 (328)、ビルマ (276)、蒙疆 (238)、ジャワ (234)、ニューギニア (199)、馬來 (159)、中支 (137)、濠洲 (125)、セレベス (56)、セイロン島 (55)、マリアナ群島 (52)、満洲 (48)、ビスマルク群島 (45)、比島 (39)、ニュージーランド (34)、アンダマン諸島 (31)、ニューカレドニア (27)、ソロモン群島 (20)、カロリン群島 (19)、東部ソ領 (18)、ボルネオ (17)、タスマニア島 (12)、ナウル島 (12)、佛印 (11)、大宮島 (グァム島) (10)、南洋 (10)、ニコバル群島 (9)、内南洋 (9)、南太平洋 (9)、チモール島 (8)、昭南 (7)、アドミラルティー諸島 (6)、スマトラ (6)、ブリヤート蒙古自治共和国 (6)、ギルバート諸島 (5)、フィジー諸島 (5)、クリスマス島 (4)、ソシエテ諸島 (4)、マルディブ群島 (3)、スンダ列島 (2)、ニューヘブライズ諸島 (2)、フェニックス諸島 (2)、外南洋 (2)、大鳥島 (ウエーク島) (2)、サモア諸島 (1)、セラム諸島 (1)、パルミラ島 (1)、マーケサス諸島 (1)、マーシャル群島 (1)、モルツカ諸島 (1)、小スンダ列島 (1)、泰 (1)、大スンダ列島 (1)

北支が多いのは、先に述べた華北交通 (1,770 枚) のものがほとんど北支であることと、「南方」地域は細分化されているのに対し、広大な地域が「北支」としてまとめられているからだろう。

北支、華北交通分については、そのほとんどにさらに細かい地名が付与されており、先に述べたとおり、華北交通の範囲と合致している。

2.6. 日付

(1) 封筒の日付

封筒の日付には、次の4種類がある。() 内は、封筒 330 枚中の枚数である。

- ・「昭和二十年三月一日受入」(41 枚) ～ 北支・中支・蒙疆のもの
- ・「昭和十九年十二月二十八日受入」(9 枚) ～ 満洲のもの
- ・「昭和十九年十一月七日受入」(35 枚) ～ ジャワ、ボルネオ、セレベス、馬來、比律賓のもの
- ・「昭和十九年九月一日現在」(236 枚) ～ その他南洋のもの
- ・日付記述なし (9 枚) ～ 北支、ブリヤート蒙古自治共和国 (2)、印度 (4)、大スンダ列島、小スンダ列島

これらの日付が、陸軍経理学校で写真を整理した日付と推測できる。

(2) 写真台紙の日付

3,705 枚中、何かしらの日付が入っているものが、627 枚ある。そのうち、23 枚は検閲の日付であり、その他説明に日付が入っているものを除くと 600 枚弱が撮影日付と考えられる。その内、最初が一番古い日付は、「大 4.4」、一番新しい日付は「昭 19.2」である（検閲日付としては、「昭和 19 年 3 月」の日付が最も新しい）。多くは、昭和 17（1942）年から昭和 19（1944）年に集中している。

2.7. その他の記述

写真台紙表には、上記の他に、写真の説明が記述されている。場所の名前だけのもの、対象の名前だけのものや、中には産業の工程、植物の特徴などを細かく記述しているものもある。

写真台紙裏には、表と同じ記述が鉛筆書きされているものが多く、中には表よりも詳しい説明が記述されている場合や、その詳しい説明を×印で消しているものなどもあり、どの時点で記述されたものかは不明である。

なお、写真台紙裏にナンバリングが打ってあるが、これは後で述べるように、1995 年の整理時に打ったものである。

3. 物理的な特徴

3.1. 封筒

封筒は、全体的に破損・劣化が激しく、記述があったと思われる部分の欠損も見受けられる。いわゆる事務用の茶封筒で、B4 判から A3 判大のもので、「陸軍經理學校」の名入りの封筒がいくつかある。

3.2. 写真及び台紙

写真自体は、いわゆる銀塩写真で、封筒に入っているものについては、それが白い厚紙に糊で接着されている。全体的に接着されているものと上部のみが接着されているものがある。写真は、ほとんどがいわゆる L 判で、A4 判くらいの台紙に貼られているが、数点大きなものがある。

写真は、だいぶ黄変が進んでいるものの、カビ等の付着もなく 50 年以上を経ている写真としては比較的保存状態はよい方である。

台紙も、かなりフォクシング（茶色の斑点。細菌・黴によると言われている。）を生じているが、50年を経過してこの状態であれば、保存環境さえ整えれば、これ以上の急激な劣化はとりあえずないだろう。

4. 整理と保存措置

4.1. 1995年時の措置

写真資料は、1995年に整理される以前は、分類され封筒に入れられたものが段ボールに、バラの写真が紙製の手提げバッグにまとめて入れられ、軍配組合資料と一緒に置かれていたようである。

1995年の整理の際には、大学院生のアルバイトと共に以下のような整理を行っている¹⁵。

1) 袋記載情報のデータベース化

封筒については、封筒ごとの記述内容と封筒に実際に入っていた写真の枚数の記録、段ボールの上にある封筒から順に整理番号を打ち整理した。またこの順に封筒の写真撮影を行った。バラ写真については、保存状態を基準として、上から写真裏左上に朱色鉛筆で通し番号を打った。

2) 写真収納封筒の再配列

「封筒の保存状態と配列との関係に有意性が見られなかったことから」¹⁶封筒を次の基準で再配列した。

(1) 地域ごととし、地域は中国を先頭に地図上で半時計回りの順に並べた。

(2) 地域内は、分類番号ごとに並べた。

3) 封筒の入れ替え

封筒ごとに、写真をSILティッシュで保護し、中性紙の封筒に入れ替え、新たな配列に基づく連番を赤色のペンで打った。

4) 封筒内の写真1枚1枚に、ナンバリングで連番を裏面左上に打った。

5) バラ写真の再配列

もともと鉛筆で書かれていた番号順に並べ替え、ナンバリングで新たに連番を裏面左上に打った。

そして、この整理に基づいて、封筒入り写真についてマイクロ化し、その紙焼きを製本

している¹⁷。また、これをもとにフィルムストリップのアルバム化も行っている。なお、元の封筒は、写真と一緒に中性紙の封筒に折り畳まれて入れられていた。

バラの写真については、撮影の計画はあったようだが、現状では撮影はされておらず、ナンバリングされた状態で紙箱に詰められている。

4.2. 2000 年時の措置

配列等は、1995 年当時のものに従い、これを崩さなかった。

写真の保存については、以下の処置を行った。

- 1) 写真資料の間に挟んである紙（SIL ティッシュ）は除去し、以下の紙と交換した。

- ・ pH7.0±0.5 無酸無アルカリノンバッファ紙（株）TS.スピロン社製ノンバッファ紙）45g/m²を裁断したもの

- 2) 現に入っている中性紙封筒から、もとの封筒に入っていた写真資料ごとに、次の保存用の箱を作成し、入れ替えた。

- ・ ISO9706（1994）に定める基準によるパーマネントペーパー製のタトウ箱

- 3) 元の封筒は、使用していた中性紙封筒にそのまま入れておいた。

いわゆる中性紙は、アルカリバッファを残しており、これが写真の保存に悪影響を及ぼすおそれがあることから、写真面に直接触れる部分については、アルカリノンバッファ紙に取り替えた。また、中性紙封筒に入れ段ボール箱に入っていた今までの状態では、扱いに不便なことと、資料の向きや重量により変形等の悪影響が出るおそれがあったために、棚に平置きできるような保存箱を新たに作成した。

5. 電子化の概要

5.1. 電子化の経緯

冒頭で述べたとおり、写真コレクションは、2000 年度の補正予算が措置され 2001 年からサービスを開始した HDA の導入に際し、最初のコンテンツの一つとして電子化された。HDA は当初より「一橋大学のあらゆるところに存在する種類のコンテンツを一元的に検索、閲覧する環境を提供」することを目標として¹⁸、紀要等に掲載された論文などの研究成果や資料等の公開を目的に構築された。現在の機関リポジトリの先駆的な例といつてよい。

この当初の構築経費が補正予算であったことから、予算内示から入札までの間がほとん

どなく、また施設整備費という予算の制約上、コンテンツにお金がかけれられないという事情も手伝い、比較的電子化しやすいものをサービス開始当初のコンテンツとして選択する必要があった。

写真コレクションは、1995年にマイクロ化作業を行われ、その紙焼きによる冊子体で作成されていた。このことにより、マイクロフィルムから電子化すれば比較的簡単にコンテンツが作成できるという判断と、写真コレクションが本学では唯一の写真資料でありいわゆる電子図書館に適している、という理由により HDA のコンテンツとして選定された。

5.2. 電子化コンテンツの作成

5.2.1. マイクロ化

写真コレクションは、先に述べたように、1995年に一度マイクロ化を行っている。しかし、電子化にあたり改めて当時のマイクロフィルムを調べた結果、コントラストが強すぎる等によりこれを電子化の素材とするにはあまり適さない、また封筒裏など撮影されなかった部分があったこと、などにより写真に適した軟調フィルムにより再撮影を行った。

写真原本から直接スキャナ等で電子化することや、カラーフィルムでの撮影も検討されたが、撮影時点ではモノクロマイクロフィルムの方が百年単位で保存できることが確実であること、スキャニング時に写真を傷める可能性がマイクロ撮影の方がより少ないことからマイクロフィルム化を行いそこから電子化を行うこととなった。また、写真がもともとモノクロなのでカラーでのデータ化は不要と判断された。

写真は、全部で 3,705 枚あり（1995年に付与されている連番は 1～3703 だが、131-1 と 1316-1 の 2 点に枝番があり、計 3,705 枚となった。）、加えて原写真が納められていた封筒が 330、それぞれ表裏で、8,070 コマの撮影を行った。

先述のように、この他にバラ写真 1,289 枚があるが、これについては、未整理で全容が不明なこと、1995年の作業の際にほとんどが封筒分との重複であるとの調査から、この時点では撮影・電子化を行わなかった。

コマ・データの配列は、1995年に整理した際の配列をそのまま用いた。

5.2.2. 電子化

上記のマイクロフィルムを元として、電子化を行った。電子化の形式としては、マスターデータを TIFF 形式とし、配信用のデータを DjVu（デジャヴ）形式とした。DjVu 形式は

ブラウザで見るにはプラグインソフト（無料でダウンロードできる）が必要である。

また、サムネイル画像（JPEG 形式）を TIFF 形式のファイルから作成した。

DjVu 形式は、1996 年に AT&T で開発された画像圧縮技術で、他のデジタル画像（BMP/TIFF/JPEG）と比べて 100 分の 1 から 500 分の 1 程度に圧縮し、また同程度の品質の JPEG・GIF 画像と比べて 5～10 分の 1、PDF と比べると 2～5 分の 1 ぐらいのファイルサイズになる。インターネットで配信するため、ファイルの軽さと相対的な画質の良さにより、DjVu を採用することとした。

マイクロフィルムからの電子化は、マイクロ撮影を行った（株）ニチマイを通じて、日本における DjVu の総輸入代理店である（株）経葉社（当時）が行った。

なお、DjVu 形式のデータは、DVD-ROM 及び CD-ROM で各 1 枚、TIFF 形式のデータは、DVD-ROM で 14 枚が納入された。

5.2.3. メタデータの作成

写真をどのように検索可能とするか、という点が当初から課題であったが、幸い写真コレクションはその台紙に簡単な分類や説明が記述されており、これを採録することによりメタデータとすることにした。

(1) 入力

マイクロフィルムの紙焼きを元に、データ化を業者に依頼した（これも（株）ニチマイを通じて、（株）経葉社が行った）。入力は、どこから採録したか（表か裏）、どのような記述か（分類か説明か日付か）などに分け、さらにそのよみを入力してもらった。

そして、業者が打ち込んだデータを校正用リストに出力し、当館内で特別体制を組み（一部、本学経済研究所資料室にも協力を仰いだ）、全点紙焼きと一点ずつ検収を行った。その結果、かなりの量の入力間違い、入力漏れが発見された。特に、よみの部分についてはかなりの修正を行った。

さらに校正用出力リストを元に、データを直す際に再度紙焼きと点検し（これは 2 名で集中的に行った）、ここでもかなりの量の修正を行っている。

(2) データ作成・校正

作成したデータを元に、HDA 登録用のデータを作成した。

データは、写真（台紙）に記述されたとおり、としたが、戦前の記述のため、旧字体・異体字・旧仮名づかい等がそれだけでは普通に検索できないため、通常の漢字等による「検索用データ」を新たに作成し、データは基本的に、表記・検索用・よみの三通り作成することとした。また、表記の字体も可能な限り活かすこととしたため、通常の JIS で対応できる文字、ユニコードにより対応できる文字、その他の三通りの処理をすることとした。

これらの作業を行っている段階では、HDA 側のデータ登録処理や検索処理、表示処理などの詳細がほとんど固まっておらず、データを作りながら要望を出しつつ、仕様を固めていくという作業を行った。その過程で、必ずしも要望どおりにシステムが対応できずに、データをそれに合わせて作成しなおす、ということもあった。

また、日付のデータ化（「昭和 17 年 3 月」や「昭 17.3」という記述を `yyyymmdd` 形式に変換し別項目として作成する）など HDA へのアップロードに必要なその他の様々な処理もこの段階で行った。

(3) データの構造—ISAD (G)

HDA では、記録史料（いわゆる文書等）を扱うために、ISAD (G) (International Standard Archival Description (General) = 国際標準記録史料記述 (一般原則))¹⁹をデータ構造の一つとして採用した（HDA では他に、NACSIS-CAT 準拠のデータ構造も使用できた）。

記録史料を扱うには、図書とは異なるいくつかの原則があるが、その一つとして、階層関係を重視する、ということがある。簡単に言うと、ある 1 枚の文書があったとして、それがどの封筒に入っていたのか、それはどこの部署のものか、何々家のものかという位置関係を重視する。従来の図書館的な整理では、その文書が家計簿だったら NDC の 598.1 に分類するが、どこの家に元来あったものかは重視されない。しかし、文書では、それがどこの家のどの長持ちにあったかこそが重要であって、その秩序を壊してはならない。

従って、写真コレクションについても、ISAD (G) によって整理することとした。ISAD (G) のモデルでは、上から `fond`、`series`、`sub-series`、`file`、`item` の 5 階層となっており、`fond`（フランス語で基礎・基盤）は〇〇家文書、〇〇コレクション全体にあたり、`series`、`sub-series` は場所や部署や分類、`file` は文字通りファイルや封筒等、`item` が最終的な 1 件ごとの書類等にあたる。

HDA でも 5 階層が使用できるように設計されたが、写真コレクションについては、`sub-series` を除いた 4 階層を使用した。(2) で作成した、写真と封筒のデータをそれぞれ `item`、

file とし、file から分類データを抽出し series データとした。fond データは、アジア写真コレクション自体に関するデータを新たに作成した。

なお、HDA から HERMES-IR への移行にあたり、上記4階層はコミュニティ、サブコミュニティ、コレクション、アイテムという HERMES-IR で利用可能な階層に、各項目については ISAD (G) からダブリンコア形式に変換された。

5.3. 著作権

写真コレクションについては、撮影者も不明なものがほとんどであり、すでに撮影後50年以上を経過し、公開する上で著作権法上の問題はないと判断された²⁰。

しかし、先述のとおり、紙裏に「朝日」「讀賣」「毎日」「同盟」の記述が見られるため、現存しているそれらの会社及び同盟通信社を引き継いでいる共同通信社と時事通信社、さらに同盟の出身者で作っている同盟クラブに念のため確認を行った。その結果、いずれも著作権については問題がなく、データベース化・公開は差し支えない、との返事をいただいた。

なお、その際、いくつかの会社から、戦前・戦中の貴重な資料なので複製がほしい、との申し出があった。これらについては、今後協力していきたいと考えている。

6. おわりに

本稿では、写真コレクションについて、その電子化の経緯、資料の背景・内容、整理・保存措置の全体について解説を試みた。しかし、背景の部分については、筆者の推測による部分が大きく、今後確認しなければならない部分も多く、多くの課題が残されている。

また、写真コレクションを使った研究は今のところ全くないが、広範な研究者によって研究されることが望まれる。もちろん、当時の風景など、単に眺めてみても楽しい資料であり、研究以外にも多くの方に利用いただければ幸いである。

なお、本稿は筆者が2000年に写真コレクションの電子化等に関わった際、備忘録的に書きとどめていたものを、書き改めたものである。

¹ 「一橋デジタルアーカイヴス」(HDA) について、一橋大学附属図書館報：鐘、2001, No.41. (オンライン), <http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/KANE/kane41.htm>, (参照 2013-01-30).

² <http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/da/>

-
- ³ 三枝辰男. 国立本館の非図書資料紹介. 一橋大学附属図書館報: 鐘. 1995, No.28. (オンライン), <http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/KANE/kane28.htm#saegusa>. (参照 2013-01-30).
- ⁴ 西川義朗. “山口先生と実証研究: 軍配組合資料についての覚え書”. 寸陰是惜八十年: 山口茂先生追悼記念集. 山口茂先生追悼記念集編纂委員会, 1975, p.448-478.
- ⁵ 昭和30年頃に当時図書館事務長であった川崎操氏によって書かれたと思われるメモ。敗戦当時に陸軍経理学校からその図書が移管された経緯のメモ等。写真コレクションについての記述はない。マイクロフィルムにより閲覧可能。
- ⁶ [陸軍経理学校編]. 「陸軍経理学校五十年史」上下, [1941.11]
- ⁷ 陸軍経理学校幹候第十一期文集編集委員会編集・企画, 陸軍経理学校幹候第十一期文集編集委員会. 「燦: 陸軍経理学校幹候第十一期」, 1987.11-1992.11.
- ⁸ 大日本印刷株式会社 CDC 事業部年史センター編. 小平市三〇年史. 小平市, 1994.3, p.188, p.269.
- ⁹ 里見脩. ニュース・エージェンシー: 同盟通信社の興亡. 中央公論社, 2000, p.149, (中公新書).
- ¹⁰ 朴順愛. 「十五年戦争期」における内閣情報機構. メディア史研究. 1995, 3号, p.1-29.
- ¹¹ 華北交通外史刊行会 [編]. 「華北交通外史」[附録]. 華北交通外史刊行会, 1988.
- ¹² 外山操, 森松俊夫編著. 帝国陸軍編制総覧. 芙蓉書房, 1987, p.849.
- ¹³ 山崎正男編. 陸軍士官学校. 8版, 秋元書房, 1991, p.263.
- ¹⁴ 朴順愛. 前掲書 [10].
- ¹⁵ マイクロフィルムと一緒にあったメモ「軍配組合写真資料整理作業過程」(文責: 辻弘範, 1995.10.23) による。
- ¹⁶ 同上 [15].
- ¹⁷ 一橋大学附属図書館. 戦前期アジア諸国写真コレクション. [自家製本], 1996.
- ¹⁸ 前掲 [1].
- ¹⁹ ISAD (G) の詳細については、アーカイブズ・インフォメーション研究会 [編]「記録史料記述の国際標準」(北海道大学図書刊行会, 2001.2) を参照。
- ²⁰ 著作権法第52条(無名又は変名の著作物の保護期間)「無名又は変名の著作物の著作権は、その著作物の公表後50年を経過するまでの間、存続する。(後略)」

[Report]

Annotation for Pre-World War II Asia in Photos held in the Hitotsubashi University Library

Ono, Wataru.

Serials Section, Library Affairs Division, Department of Libraries and Information,

Hitotsubashi University